

「んぐ……ちゅ、あ……アルフレッド……様……っ! 」

「ん……む……ルチア……舌、絡めてくれ……」

彼のすべすべとした舌が私の舌を絡め取り、上顎を撫で回し、私の吐息ごと吸い上げていく。

じゅっ、と湿った甘い音が静かな客室に響き渡る。

「んあ……ふあ……っ」

お酒も飲んでいないのに、頭が猛烈にクラクラした。

彼のシトラスと甘い煙草が混ざった香りの体温、肌の熱。それらが一気に脳内になだれ込んできて、私の理性を木っ端微塵に砕いていく。

「ルチア……可愛い……ずっと、こうしてお前を抱きたかった……」

彼の手が私のネグリジェを完全に脱がせ、私の全裸の身体がベッドの上に晒された。

彼の大きくて少しザラついた温かい手が、私の細い腰を撫で上げ、下着越しに私のみすぼらしいと思われていた豊かな膨らみを包み込んだ。

「あ……ダメ……私、胸とか……大きくて変じゃないですか……？」

「変なものか。最高に柔らかく、美しい。私の手がちょうど収まる」

アルフレッド様の手がブラジャーのホックを外すと、私の豊満な胸が露わになった。

彼は躊躇なくそこに顔をうずめ、先端を舌先で優しく転がした。

「んああっ！ アルフレッド様、ダメ……吸わないで……っ！」

「んちゅ……じゅ、ふ……ルチア、声……すごくいい……」

直接吸い上げられるたびに、お腹の底がキュンと絞られるような快感が走る。

今まで知らなかった自分の身体の性感帯が、彼の唇と手によって、ひとつひとつ開花させられていく。

彼の指先が、私の下着のゴムを押し下げ、濡れそぼった秘部へと潜り込んできた。

第4章：溺れていく快楽、密やかな密夜